

総括討議

雑誌名	日本研究・京都会議 KYOTO CONFERENCE ON JAPANESE STUDIES 1994 ?
巻	.non01-04
ページ	277-290
発行年	1996-03-25
その他のタイトル	General Discussion
URL	http://doi.org/10.15055/00003615

総 括 討 議

議 長：河合隼雄（国際日本文化研究センター）

日 時：1994年10月21日(金)
15時30分～16時30分

場 所：国際日本文化研究センター講堂

総括討議

議長：河合 隼雄（国際日本文化研究センター）

KAWAI Hayao

河合　それでは時間になりましたので、最後の総括というところを始めたいと思います。先ほどから挨拶にありましたが、最後を飾る梅原先生の話がありましたので、私は飾らなくていいわけで、気楽にやらさせていただきます。お疲れだと思いますが、全体の、いちおう総括ということでさせていただきます。

まず全体の総括でございますが、私が得ました結論は非常に簡単でございます、総括不可能ということでございます（笑）。これは皆さんおわかりだと思いますが、42か国から来られまして、日本人以外の方は約160名、そして全体の参加された方が約600名。そしてそれが66のセッションに分かれて討議が行われました。

そしてその範囲ですが、日本語とか日本文学というのを越えまして、政治、経済、法律、社会、歴史、ユニバーシティといってもいいような、非常に広い範囲に広がりまして討論がおこなわれましたので、これを私が総括するなんてことは不可能でございます。私がしばらく話をした後で、皆さん自分の出ておられたパネルなんかで、考えられたこと、感じられたことを、ご自由にいただければいいんじゃないかと思います。

ただ最後に全体を通じてのシンポジウムという形で、「型」、日本の型ということを取りあげたシンポジウムがありました。学会のシンポジウムというのはだいたいおもしろくないというのが定評なのでございますが、これは実に非常におもしろいシンポジウムで、こういうのを「型破り」のシンポジウムというのだろうと思っていたのですが、なかなか興味深い話ができました。

その時に印象に残ったことが二つありますので、それをちょっといわせていただきます。まず第一点印象に残りましたことは、アメリカから来られましたトマス・ライマー先生が、日本の能について話をされました。日本のほうからでられました武田建先生が、アメリカンフットボールの話をされました。これを聞いておりまして、日本研究といっても、これは日本のことを外から研究するというのではなくて、結局は、文化交流、exchange になっていると思いました。だから外国から来られた方、あるいは外国の方がたのお話を聞いて、われわれは日本のことだけではなくて、結局は他の国を理解するということをしているわけですし、もちろんまた海外から来られた方がたが、日本のことを理解されて、それをもって帰っていただくといえますか、cultural exchange ということが、本に行われたのではないかと思います。

次に思いましたことは、これは熊倉先生のお話の中にありましたが、日本人は型を覚えるということを実に大事にすると。これは何もむずかしいことではないのだ。どういう発想かという、どんな人でも形だけ覚えておけばできるのだ。だから一人の人がどんな才能があるとか、どんな能力があるかなんていうことは抜きにして、茶の湯の型を覚えれば、茶の湯ができる。だからマニュアルに従ってやれば、誰でもできるというところに型という発想があるので、これは「易

行」である。だからみんなが易しく、易行で大事なことができるという意味でこういう型ということができたのだということをいわれまして、私非常におもしろく思いました。

ところが、それからがおもしろいので、易行をやると易行ですから、誰でも茶の湯を覚えたら全部できる。生け花でも、生け方を教えてもらおうと誰でもできる。これは人間全部平等で同じなのだということで話が終わるのかと思っていますと、急に話が変わってきました、それでも粋と野暮ということがある。同じようにやっても、粋な人と野暮な人がいる。この粋な人と野暮な人はなかなかマニュアルに書けない。

熊倉先生は、ご自分の体験か何か知りませんが、男女の関係のことをおっしゃいまして、男女の座り方でも、粋な座り方と野暮な座り方があると。あまり遠いのも野暮だけれども、あまり近いのもまた野暮になる。ちょうどいい座り方があって、これはやはり夏と冬と、朝と夜と違うそうです。

私あまりはっきり知りませんが、粋な位置というのがあると。この粋な位置というのは、冬は5メートルとか、夏は12メートルとか決まっていない。だからその時の空気その他ですと粋にいく人と、野暮な人がいるという話をされまして、これは計量不能な世界ということをいわれました。つまりマニュアルが通じない世界なのですね。そうするとここはその人の個性ということがすごく関係するのではないかと思います。初めの誰でもできるという話から、ずっとここで変わるわけですね。

それを私聞いておりまして、すぐに思いましたのは、初めの誰でもできるという点、全部平等だという点を強調しますと、私は心理学をやっておりますので、外国の方と話し合いますと、すぐ日本人の心の問題になってくるのですが、よくいわれるのは、「日本人は個性がない。みんな同じことをいう」と。集団主義なんていう言い方もされたりしますが、今のこの熊倉先生の話聞いておりますと、個性という時に、われわれ注意しなくてはならないのは、英語でいいますと個性は individuality ですが、individuality という言葉を使う限り、これは知らず知らずのうちに、西洋の近代に起こってきた個人主義、individualism ということをおまえて、個性ということが考えられているのだと思います。そしてたしかにそういう考え方でくれば、日本人には個性がないという言い方ができるかもしれませんが、私はこの頃英語で話をする時には individuality という言葉は使わなくて、人間はそれぞれ違うのだから eachness という言葉を使ったらどうかと考えています。個性を individuality というと、皆さん individualism に基づいたことばかり考えられますので、個人主義に基づかない個性ということを考える時に、eachness ということをついたらどうかと。そういうふうにいいますと、この熊倉先生の話は、たしかに初めは誰でもできると始まっているのだけれども、ここはたしかに individuality がないようだけれども、その最後のところでぽっと個性が入っている。これはやはり eachness が入ってくるという話として、私は受け止めたわけです。

こういうことをなぜ申しますかというのと、どうもパネルでいろいろありました議論なんかを聞いていますと、この日本人の個性とか、平等性とか、型とか、そういうことがいろいろ問題になってきたようでしたので、ちょっと私自身の考えを申しあげたわけです。

それから、私はここで総括ということをしなければなりませんので、実はいろいろな方に感想を聞いて回りました。ほとんどの方の共通していわれたことは、多くの学者がここに一同に集まっ

て、日本研究ということを共通にして、いろいろな人が直接に会えたということは、非常に大きいことであったというのは、どなたもおっしゃいました。

特に論文を読んで名前を知っていても、アメリカの方とヨーロッパの方とか、あるいは韓国の方、中国の方、お互いに会ったことがない。それが、ここで直接に会えたので、討論ができたり、話し合いができた。これが非常によかった。これがいちばん大きいことだったと思います。

その次にいわれましたのは、思いがけない出会いがあったと。例えば自分と同じようなことを考えている人が、よその国におられると思っていなかったのに、バスの中で話をしていると、あなたもそんなことを考えておられましたかとか、また全く違った情報が入ってきたりしまして、バスの送迎の間に話したことがすごくよかったといっておられました。私はそのバスが日文研でなくて嵐山へでも行けばもっとよかったのではないかと思ったりしましたが…。そういう偶発的に生じた出会いの大事さも言っていて、これはやはりこういう会をしたことがよかったのではないかなあと思いました。

それからもう一つちょっとおもしろいと思いましたが、この頃は、自分の国では、いわゆる日本語、日本文学、日本史というのではなくて、日本に対する現代の政治、経済、産業、いろいろなことに対する関心をもった人が増えてきているのだけれども、そういう日本に対する関心をもっている人は、あまり日本語を話されない。今回は、日本語を話される方が非常に多かった。これはタクシーに乗るたびに、タクシーの運転手さんが感心して教えてくれました。「みんな日本語がお上手ですね」とか、中にはタクシーの運転手さんにいろいろ survey をされた方もあったようで「嫁と姑の関係はいかがですかと聞かれました」とか(笑)、おそらく文化人類学者の方じゃないかと思いますが…そういうのもされたそうですが、日本語が非常によくおできになると。

日本語と英語ということが共通語としてこの会はあったのですが、実はフランスでも、ドイツでも、中国でも、日本語はちょっと勉強する気はないけれども、日本にすごく関心があるという方がずい分おられるので、そのことを考えてほしいといわれた方がありまして、私これはなるほどと思いました。

これはわれわれここにいる日本文化研究センターのものが、今後考えねばならないことではないかと思いました。ここにみんな来てくださえばかりいわずに、われわれが出ていって、英語なり、ドイツ語なり、フランス語なり、そこのお国の言葉でそういう問題をディスカスするような機会があればいいんじゃないかということも考えました。

それからこれは非常にたくさんの方がいわれたのですが、あまり大きい声でいえないのが、「こういうのがもう一度あればいいなあ」という意見でございました。ただこれはあまり大きい声でいえないのは、事務の方がたにいますと、「えっ」ということをいわれるので、これは事務の方がいろいろ準備のためにご苦労いただいたのでよかったのですが、これが4年後になるということになると大変なことになりますので、何年後かは知りませんが、やはりこんなことがあったらいいのではないかと、これもたくさんの方がおっしゃいましたという事実のみ申しあげておきます。

それから運営、その他、食事とか、ホテルとか、そのへんのことをいろいろ聞きましたが、ほとんど不平、不満を直接にはいわれませんでした。恐らくいろいろあったのではないかと思いますけれども、皆さん非常に協力をしてくださしまして、お陰様で本当にうまくいったのではない

かと思います。心の底のほうでは、お陰様だけではなくて、われわれもよかったのではないかと
思ったりしていますが…。日本的にいいますと、皆さんのお陰で非常にうまくいきまして、あり
がたく思っております。

以上のようなことが私がちょっと思いついたことでありまして、後は皆さんが出席をされまし
た中で感じられましたこと。できましたらなるべく総括的なことのほうがいいと思いますが、そ
れを分けてやっておりますと時間も限られておりますので、どんどん話をしてくださったほうが
いいのではないかと思いますので、ご意見のある方は申し訳ありませんが、手をあげていただけ
ますでしょうか。どなたかありませんか。全体的な感想、ご意見、不平、不満もありませんかと思
いますので…。

● 河合先生がだいたいいわれましたが、その後はもう少し印象がありましてね。例えば諸国
から色々な人が来て、年は違いますね。芳賀というものは、何年も前から知っていますが、また
この会議で新声を聞きましたね。若い人の声。それが大変うれしいと思います。将来をある程度
まで見つけましたね。

そして日本の将来はどうなるかパネルがなかったかと思いますが、未来を見る人は少ないです
が、しかし日本という国は経済的にいえば、鉄も金もそういうものがなくて、日本人だけ、日本
人の教育を持つことだけですから、それはこの国の宝物ではないかと思います。それをこの会議
でよく見ましたからありがとうございます。お礼を申しあげます。

河合 どうもありがとうございました。若い人の参加はたしかにあって、本当によかったと私
も思いました。他にございませんか。どんどんご遠慮なく。できたらお名前をいっていただけれ
ばありがたいです。

● プリンストン大学の町田ですけれども、最初に参加させていただいたお礼を申しあげます。
ありがとうございます。先ほど河合先生が、不平はほとんどなかったとおっしゃいましたが、
私一つ不平がございます。私毎朝、京都駅の裏の新都ホテルからバスに乗って連れて来ていた
いたのですが、毎朝大型バスに、40人か50人乗れるバスに6～7人しか乗って来なかったです
ね。あれはとても無駄だと思います。むしろマイクロバスをひんばんに、ホテルとセンター、あ
るいは桂の駅とここに走らせていただいたらとても便利だったと思います。それは非常に卑近なこ
とで…。

もう一つ感じたのは、せっかく世界中からこのように非常に刺激のある意見をもった学者さん
たちが一堂に会しているのに、割合に日本国内から、大学関係の方、あるいは大学院生とか、そ
ういう人たちが、もっと耳を傾けに来てよかったのではないかなあと考えています。せっかく
の貴重な機会を十分に生かしていないような気がしましたので。そういう人たちがもう少し来や
すように広報されるなり、別にそういう旅費をだすとかそういうことでなしに、もっとせっか
く日本の国内でこういう貴重な場が開かれているわけですから、日本国内で非常に凝り固まった
人たちが多いわけですから、そういう人たちに啓蒙の機会として、大いに門戸を開放していただ
きたいと思います。

河合 ありがとうございます。先ほどおっしゃいました「できるだけ開いて」というのは、
ちょっとジレンマがありまして、収容の人数が限定がありますので。それとわれわれとしては、

外国の方に来ていただきたいということから、実は日本からの参加者の人を非常に絞ってしまったのです。そのためにここでぎりぎり一杯です。これはクローズドにしましたからね。オープンにしたら、もっともっと来られて、実は困ったと思うのです。これが最大限というところなのです。凝り固まった方はいくらオープンにしても固まっておられるような感じを（笑）受けるのですが、そういう点もこれから考えてみたいと思います。

● 中国から来た遼寧大学日本研究所の金明善です。このたび日本研究の共同会議に出席して、その一番大きな感想を一言でいえば、日本研究の視野を広げたということです。これは一つは、ぼくはアジア圏日本研究を、30年続けました。しかし思えば経済のほうの中日の関係の枠で研究して、その他はそんなに関心がありませんでした。このたび国際化の中の日本をどう見るかというこのように、非常に役立ちました。

もう一つは、このたびいろいろな方と、各国の方と話し合いながら、アメリカとかイギリスとか、東南アジアとか、各国は日本をどう見るか。どのように研究するか。これは非常に役立ちました。

もう一つ視野を広げたということは、今話しましたが、ぼくは経済専門ですが、ぼくの結論は、日本を知るには、日本の経済を深く研究するが、最後には、日本人の特徴を研究しなければならない。こういう点において、今度の会議は、非常に興味深い感想を受けました。日本研究の視野を広げたということです。

もう一つ残念なことです、この会議の討論の時間が30分ですね。とても時間が短くて、何か十分な意見の交換がありませんでした。せっかく来たのに、少し残念な思いがしました。

最後に、今回、国際交流基金から招待されて来ましたので、もう一度感謝します。それから今度の会議にご苦勞なされた、国際日本文化研究センター、特別に中国の皆さんのご苦勞に敬意を表します。

河合 どうもありがとうございました。たしかにおっしゃる通りで、討論の時間もなかなかむずかしくて、もっともっと討論したかったというのを、私もお聞きました。これは初めに言いましたように、非常に広い範囲でセッションを増やしておりますので、そういうことが起こって、こういう機会に知り合ったところを、また深めることは、また小さい会議なり、小さいグループなりでまたどこかでやっていただければありがたいと思います。

それから先ほどたくさんの方と付き合いができてよかったといわれましたが、私思い出したのですが、先ほど韓国から来られました李榮九先生とお話しましたが、70枚名刺を持って来られども、全部なくなったといっておられますので、これは相当な交遊関係ができたのではないかと思います。

● Melanowicz と申します。アール・マイナー先生のお話の続きから始めます。日本の将来のことを考える、セミナー、セッションがなかったかどうかという件に対して、そうですね、残念ながら小松左京さんをよんでくださらなかったから、その将来のことを話す機会がなかったことを大変残念に思います。大江健三郎を招待して下さって、本当に私心から感謝いたします。

その次の日、またその次の日、一人ずつ日本のそういう大家、小松左京とか、日本語がこれからどうなるか筒井康隆に聞いてほしかったんです。そしてだんだん、～不自由な人という日本語になるんじゃないですか。ハゲ頭ともいえないし、髪の毛の不自由な人ばかりという、日本がど

ういうふうこれから発展するかなあということを、話し合ったほうが私は幸せです。

もう一つ、ちょっと真面目な話になりますが、私は1991年、この日文研に招待されまして、まだこの立派な講堂などでできあがっていない時で、いろいろ進行中の時代といひましょか…。その時、まだこれからたくさんつくらなければならないのに、私と亡きユーゲンベルグ先生と、梅原猛先生に、大変なことをいってしまったのです。

日本では72年に、日本学国際会議があったきりで、その第二会議が今までなかったということ。その時、梅原先生はそれを本当によく心に受け止めて、そんなに早く実現させてくださるとは信じられませんでした。その梅原先生を始めに、日文研の皆さんは、どのくらい苦勞をさせたかお詫びしたいと思います（笑）。このくらいで終わらせていただきます。

河合 ありがとうございます。日本の将来とか未来のことを考える会もあったらよかったのではないかということは、たしかにその通りで、できましたら今日のパーティの時に、皆さん日本の未来を語り合ってくださいればありがたいと思います。小松左京さんをよぶと、日本は沈没するなんていうんじゃないかと思って、ちょっと心配しておりました（笑）。他にございませんか、どうぞ。

● コロンビア大学、図書館の牧野泰子でございます。このたびはお招きいただき、発表の機会まで与えていただいて、その他に世界中の学者、日本の学者の、書物だけで拝見していた先生がたのお顔、姿を直接拝見することができて、本当にありがたかったと思います。

これはないものねだりかと思いますが、私もいろいろなセッションが、出たいものが重なってたりして、大変残念な思いがいたしました。ただ1週間という長い期間をとってくださって、66のセッション、それから一つのセッションがいくつもに分けていらっしゃり、プログラムの作成はすでに大変でいらしたと思いますけれども、そのことだけがちょっと心残りでした。本当にありがとうございました。

河合 ありがとうございます。それは私もお聞きしました。これはなかなか会場の設定とか、期日とか、われわれ実は組織委員の先生がたのご意見もお聞きしたりして、実行委員の者が割り振りしたのですが、こういう結果になってしまったといひますか、いろいろ制約がある中でこうなったのですが、たしかに1度に2つも3つも部屋に行けませんので、このことは今後も考えたいと思います。私なんか1度に3つも4つも行きたいところがあって、心ばかり急いで、体は眠ってしまった（笑）しておりましたが、あまりそういうことのないように、これから考えたいといひます。他にございませんか。

● 北京大学のものです。賈蕙萱と申します。今、日文研の客員研究員をしています。ただ今たくさん先生が感想をおっしゃいました。私は一つだけ感謝の気持ちで提案をいたします。今さっきの先生がおっしゃったことは、私はいろいろな分科会に参加したいですが、分身法がありませんから、孫悟空のような分身ができればうれしいと思いますが、できませんので、資料のほうを私は提案します。

資料とレジュメは、私は英語はそんなにしゃべれないし、読んでもわからないところが多いですから、もし時間があれば、日本語に訳してくださればありがたい。もちろん日本語のできない英語だけがわかる先生がいると思います。そのレジュメは、英語と日本語両方あればありがたいです。ですから将来このような資料を出版する場合は、英語と日本語両方を出版してくだされば

助かると思います。どうもありがとうございました。

河合 どうもありがとうございました。これは大変な会議でしたので、プロシーディングは作りたいと思っております。ただ全部一緒にしますものすごく太い本になって、誰も読まないということもおこり得ますので、なるべく関心がある方が読まれるように分けたらどうかという案がでております。

今おっしゃいました英語と日本語の問題ですが、これはできる限りご要望にそいたいと思いますが、現在のスタッフではそこまでちょっとできるかどうかは請け合いかねます。日本語を英語に、英語を日本語に全部すればいいのですが、必ず「やります」というような元気はありませんが、ご意見はどうもありがとうございました。

● ヨーク大学の布施と申します。ありがとうございました。やはり今回の会議の重点の一つが、日本人の精神構造とか、心という大切な問題に触れたわけですが、その場合重点が当然のことながら、宗教、文学に向いておりました。そこでやはり科学的なメスとの接点を考えるという意味で、例えば、小此木啓吾氏の見る日本の精神分析とか、例えば河合先生と小此木先生との対談なりパネル、私、例えば今日の話を聞いていて、皆さん方、深層心理というと、ユング派と考えている方が多いと思うのですが、これは先生自身も不本意だと思いますが、趨勢からいうとやはり別な方面からの見方も必要になってくるわけです。

それで私の要望としては、精神文化とか精神構造を理解する上に、科学的なメスとの接点ををはかるという意味で、今後例えば、深層心理の面を入れていくと同時に、日本の精神的土壌で生まれた、非常にユニークな精神療法、例えば内観療法ですね。内観療法の方にやはり参加していただくということも、これからは非常に世界にとって日本に貢献しうる方法だと考えております。

河合 どうもありがとうございました。深層心理のほうもがんばれということですので、私も忘れないようにしたいと思っております。

● 私はタイのタマサート大学の政治学部にありますプラサートと申します。この時間をお借りして、私の期待を若干述べさせていただきます。日本研究に関しまして、日本研究をやっている大学の先生がた、また教えている方がた、特に発展途上国の場合は、若干問題に直面したり、相談相手がどこにいるかと時々考えています。国際交流基金には、資金の面などの役割をはたしていますが、研究内容の相談をしてくれる方がた、日本人の学者は、大学の先生にもいろいろいらっしゃいますが、日文研の研究の先生の方がたは、われわれの時々相談相手になっていただけると、ちょっと自信がありません。

そこで例えば特定な問題を研究していて、その問題に関して、日本にちょっと1週間ぐらい旅行して、日本に来て、相談相手は日文研に行こうと思えば、ここは歓迎していただけるか、ちょっと自信がないです。

一つの期待ですが、相談相手、また気軽に来られるような雰囲気、アメリカのハーバードのイーストウエストセンターみたいに、宿泊施設があって、そこで研究プロジェクトなどがあると、1人だけじゃなくて、3~4人でも日本に来ると、相談相手はおそらくいらっしゃいますが、先生がたお忙しくて、相手になっていただけるか、そのへんが日文研に対する期待になります。

二番目に、今回の日本研究京都会議は、一つあったらよかったなあと思うのは、あまりフォーカスがありません。日本研究、非常に広くて、フォーカスがなくて、例えば日本研究、

hollowization 時代の日本研究とか、そういう課題であればいろいろディスカッションしやすく、いろいろ考えさせられます。

最後になりますが、日文研は海外にはおそらくランチデスクはもっていないと思います。他の研究機関と比べてまだ歴史が浅くて、一つの期待ですが、例えば東南アジアにおいて、日本研究、今回は京都会議ですが、各地域において、そのへんに日文研をという期待は、その役割を将来果たすことができるようにも期待いたします。以上です。ありがとうございました。

河合 どうもありがとうございました。非常に有用なことをいってくださいました。相談に気軽にというのは、待っておりますので、どうか気軽に来ていただきたいと思います。それと3番めにいわれました、海外にランチがあればどうかというのは、それとも関係すると思うのですが、何か海外へわれわれが行って、それこそ相談に応じたり、日文研とのつなぎをしたりするというのも、今後の課題として非常に大事なことをいってくださったと思います。何とかわれわれもそれが実現できるように努力したいと思っております。ありがとうございました。

宿舎は、まだ全部ではありませんが、だいぶできてきつつありますので、それももう少しご要望にこたえられるのではないかと思います。

● トーマス・クラムです。3週間前までアムステルダム大学の教鞭をとっておりました。22年間アムステルダム大学の教鞭をとっておりましたが、今回非常にこの京都会議、楽しませていただきました。実は久しぶりに発表がなかったものですから、自分の立場を気にせずにとんどんコメントができたことがよかったわけです。

まず第一点に、通訳者が英語から日本語にと通訳を、日英とともどもにやってくれたというのが非常に助かりました。

二番目に今回すばらしいなと思いましたが、常に継続して、若手の研究者の刺激をしていたと思います。やはり教育という時には、特に、若い人々の教育ということが大切だと思います。

オランダの場合、特に学会関係の、若手の研究者を、トレーニングする、われわれの各学部におきましても、なかなか長期的な視野にたった施策がとられておりません。若い人々というのは非常にいいとしても、5年か6年たちますと、なかなか教鞭職というのがない。助教授職と、大学に残ることができないというのは、これはオランダだけの問題ではないと思います。

どうしても予算削減ということが、合理化が進んでいるということで、トレーニングは非常にいいと。より多くの人々にトレーニングを与えると。生涯、学会で生きていけるような道を、トレーニングを受けた若手の研究者に与えるべきだと思います。

三番目の点というのは、実はプログラムの分析に時間をかけてみたいと思います。いくつもテーマがございますね。100以上のテーマとおっしゃいましたが、とにかくたくさんテーマがいくつか同時進行でセッションがありました。

しかし統計で見ますと、すべての日本研究に関する各分野に、非常に均等に割当てられて、日本人の方、外人の先生がたの発表がありました。したがって、あるセッションごとには、それぞれ日本の先生がたのテーマというものがあり、また外人の先生がたにはそれなりのテーマがあったと思います。

例えば私が非常に興味をもちましたのは、雪に関するもの。私自身が好きということではなくて、好奇心があったから行って見たのですね。そこで3つのすばらしい発表を聞きました。すべ

て英語だったわけで助かったのですけれども。ちょっと自問自答したのですね。はたして日本の先生がたというのは、こういうことに関心がないのだろうか、ご発表が全部日本人以外の先生でございましたから。

そして歴史を考えてみると、日本の文化史を考えると、雪というのはやっぱりもっと大きな役割をはたしたのではないか。何か日本人の先生と、それ以外の先生がたと考えた時に、日本人の先生はどうも真面目に取り組みすぎるのではないかなあと。実践的なものに役立つテーマだったり、もしくは文学的なテーマだったり。

特に型のお話がありましたね。非常にこの型のシンポジウム。今までそんなに興味がなかったのに、今回非常に興味をもちました。したがって、日本の伝統、日本に深く根ざしていないもののほうが、かえって外人にはとっつきやすいものもあるかもしれません。

また他の方もおっしゃいましたように、今回はとにかく素晴らしい会議でございました。とにかく卓越した組織であり、今後もこれが続くことを真に期待しております。

河合 私は全部理解したとはどうい思えませんが、どうも最後のあたりは褒めてもらったらいいということがわかりまして（笑）、うれしく思っております。他、ご意見いかがでございすか。

● ネパールからのものです。私の今回の滞在で、たくさん日本のことを実際体験することができて、それからまたネパールでこの日本の経験を活用して、ネパールの国の開発のために、なりたいと思っています。

一つここで提案したいことは、この種のセミナーを始める前に、できれば資料を事前に参加者に出しまして、すなわちこの会議からどういうものを期待するかと。なぜ参加するか。そしてどういったことを期待するのか。こういったことをたずねていただきまして、そしてセミナーが終わった段階で、同じようなアンケート調査をすると。何をこの会議から得ることができたかと。

そしてこの事前の調査と事後の調査を同じ人たちで比較したならば、よりよいフィードバックができと思うのです。どの程度までこの種のセミナーが、本当に達成することができたのか。またどういったことを、私たちは将来しなければいけないのか。よりよくやっていくためには、成功をおさめるためには、何ができるかというフィードバックになると思います。

● オランダのライデン大学のヤン・ファン・ブレーメンです。また私も他の人と同じように賞賛に入る前に、一つ将来の会議に向けて提案したいと思っています。ぜひこのようにしていただきたいと思っていることがあります。会議疲れという言葉がありますよね。3日ぐらいたちますとそういった会議疲れがあるわけです。ですから組織委員会の方をお願いしたいのは、こういったサイズで、しかもこれだけの日程の会議ですと、エクスカッションはちょうど真ん中の日に持ってきたほうがいいです。最後にもってくるよりも。真ん中にもってくるのがいいと思います。

これが改善のための唯一のアドバイスでありまして、またこの会議の主催者に対しまして、また共催者に対しまして、このような会議を開いてくださったことに感謝したいと思っています。またぜひこの会議をやっていただきたいと思っています。私だけがそう思っているだけではありません。ここにいらっしゃる多くの方がたがそう思っています。

それから大きな拍手を、実行委員会の舞台の表で働いている方がた、それからまた舞台裏で働いている方がたに対しまして、いろいろと資料を用意して下さったり、今でも舞台裏で働いて

いらっしゃる方に対して、聞こえるように大きな拍手をしたいと思います。(拍手)

あともう一言、この会議をぜひまた将来やってください。いろいろな理由がありまして、それには十分な言及があったかと思いますが、もう一度繰り返して私もここでいいたいわけです。それからまたいつやるかということですが、河合先生のほうでは、この会議は1年に1回やるのはとてもじゃないけれどもいやだということですが、5年間隔ぐらいにやるというのはすばらしいことだと思います。ぜひまたこの会議を開いてください。

河合 その通りできるかどうかはわかりませんが、どうもありがとうございました。

● 別府と申します。日文研の皆さんが非常に努力をつくしまして、今回の会議を成功裡に終えることになりまして、私自身も個人として、組織委員の皆さん、ないし事務局の皆さんにお礼を申しあげたいと思います。

この後は英語でいうつもりだったのですが、考えるところがございまして日本語で申しあげたいと思います。この総括会議も時間がないので、私が最後ぐらいになるかと思っています。私が申しあげたいのは、こういう非常に立派な会議の後に申しあげるのは何かと思いますが、海外からの参加者に対して中心に申しあげるのですが、われわれ外国で日本研究をする人たちの大きな、世界的な組織をする必要があるのではないかと思います、その案を申しあげたいわけです。

日文研のような立派な組織がありまして、今回のような立派な国際会議をしたのですから、われわれ今さらそういう世界的な組織をつくる必要はないだろうと思われる方もあります。そんなことをして会議をするより、手をこまねいて待っていれば、そのうち日文研から招待状が来ますから、それを待っていればいいんじゃないかと(笑)ということになるかもしれませんが、しかし外国で日本を研究する場合。

つまり日本を他者として見る場合と、それから日本人が日本を自者として見る場合と、おのずからその知的なプロセスというのは違ったものがあると思うのです。のみならず、他者と申しまして、韓国の日本学者が日本を見る場合と、あるいはフランス人の日本学者が日本を研究する場合と、同じ他者ではないわけですね。

ですから他者といいますが、それは複数の他者になると思うのです。ですからそういった複数の他者が、いったいどういう関係になっているのか。そのいろいろな知的プロセスというものを、比較してみる必要があるのではないかとということを中心に考えているわけです。

その他いろいろ、もっと具体的な理由などは、私今までにいろいろなところで書きまして、発表していますので、皆さんがもし関心がありましたら、私に申しあげていただきましたらお送りいたします。今日は時間がないので、それに対して申しあげません。

そういうわけで、海外にいる日本研究者が総合的に、コレクティブなアジェンダを作って考えていくという、そういう場を作っていく必要があると思うのです。ヨーロッパなどではすでに大きな組織がありまして、そういった研究がなされているのですが、日本学者の少ないところ、例えばラテンアメリカ、南アジア、アフリカなどではそういう組織がありません。そういった人たちも含めて、大きな組織を作っていく必要があると思うのです。そういった人たち、ラテンアメリカとか、中近東の日本学者の考え方もおおいにわれわれは聞いていく必要があると思うのです。

しかしそういう組織をどのように作ったらいいかということは、私はここで口頭で申しあげているだけで、書いたものも何もありません。組織の憲法とか、規則とか、会則とか何もありません。

んし、もちろん予算も何もないわけです。そういうものを作っていかなければならないのですが、それは当然、関心のある方皆さんと一緒に作っていくものだと思うのです。

それに関してまして、国際交流基金の方がたにお話しましたら、そういう組織はあるのは非常に喜ばしいけれども、交流基金のほうではそれに対して、自分のほうから行動をとるつもりはないと。海外からそういう希望があればそれに対して、適当な反応を示す、協力をするということです。それから日文研の側も、これはあくまでも海外の日本研究者のことであって、日文研そのものが主力になってやるものでは全然ないということです。

ですから日本のいろいろな組織におんぶをしてやろうという考えではないわけです。ですからこれは非常に大きな作業になると思ひまして、当然個人ではできませんが、多くの方がたがもしこれに賛成して、参加してやるという意味がありましたら、そういう組織ができるのではないかと思います。あくまで私自身の個人の考えとして申しあげました。ありがとうございました。

河合　ありがとうございました。だいたい大事なことは時間の終わりに出てくるのですが、大変なことができました。それに対して何かご意見ありますか。

●　この国際日本文化研究センターにおります芳賀でございます。今回組織委員会の一員としてこの学会の組織にあたりました。今回は42か国の諸外国から、約270人の外国の研究者が参加してくださいました。その他に国籍不明という方がたもおられたようですが、日本に今おられて、ここに参加された方が、その外国人のうち100人ぐらい。後の170人ぐらいが外国から来られて参加してくださいました。日本国内からは400人ぐらいが参加してくださいまして、両方合わせまして650人ぐらい。さらにこの会議が始まってから思い立って来られた方もおられますので、延べにするともっと数が多くなると思います。これだけの方がたがこの京都に、ちょうどいい季節にお集まりいただきまして、大変充実した会議を開くことができて、誠にありがたく思っております。

私自身は、私自身が直接に関係した二つのパネルに出る、出ずっぱりといいますが、ずっと出ておりましたので、他のセッションをのぞく機会がなかったのが非常に残念で、それは先ほどどなたかがおっしゃったのと同じで、これだけいろいろパネルがありながら、あまりたくさん出られなかった。それは体一個の人間である以上、やむを得ない宿命でありまして、本当に孫悟空でもなければできないことであります。どんな会議でもそのことはあるわけでありまして、だからこれはそういわれたからといって、変えようもありません。

しかし私も直接関係したパネルに、文学と、美術に関わるほうであります。出てみますと、大変いい発表、水準の高い発表が相次いで、しかも時間が足りなくて、足りなくてしょうがないのですが、足りないから一層インテンシブな発表が行われて、時間があんまりたっぷりあって、もてあますということは全くありませんでした。

時々他の学会によっては、時間が余ってしまって、ぼやっとしているということもあり得ますが、そういうことは一切ない学会でありまして、時間が短かったのもあしうがありません。狭い枡の中にたくさん詰めたわけですから。5合の枡に1升詰めたぐらいの感じでありますので、やむを得ない。これも学会というものの宿命であります。どこのどんないい学会へ行ってもみんなそんなものであります。討論の時間がたっぷりあった学会なんて、あった試しがありません。

河合　残念ながらこれもあまり時間がないのです（笑）。

● そうですね。ちょっと弁明をしたく思いましたので、そういうことを付け加えさせていた
だいたわけであります。

しかし考えてみますと一番最初にアール・マイナーさんがいわれた通り、今回は様々な諸国の
長老の学生たちが来られましたし、さらに30代から40代の、ヤンガー・ジェネレーションのスカ
ラーズの参加がありました。その方たちが非常にいい発表を次々になさった。これは誠に印象深
い。日本研究というものの、日本にとってだけではなくて、諸外国も含めて、日本研究のために
非常に有望な…。

だから小松左京をよんで未来を論ずるよりは、はるかにそれを感じるもののほうが大事だと思
います。小松左京をよんで、日本の未来を論じても今さらなんてことはないわけでありまして。
ここに集まったヤンガー・ジェネレーションの学者たちの研究の充実と、水準の高さ、それを感じ
ることが日本の未来を頼もしく思わせてくれるのであったと思っています。

それから非常に幸運に恵まれた学会となりました。一番最初の大江健三郎さんの講演。あれは
本当にあの時も何回もいわれましたように、あの人はノーベル賞をもらうとは思わずに、去年の
うちから河合さんがお願いしてあった。そうしたら本当に講演の3日前か、4日前にノーベル賞
になっちゃったわけで、本当にラッキーでありまして、いいスタートでありました。

それから昨夜、会議が5時半に終わって、夕方7時から雅楽のリサイタルがありましたが、あ
の時も、始まる時まで空が一面に曇っておりましたのに、音楽が始まったら見る間に雲がすーっ
と晴れてきて、こうこうたる月が日文研の背後の山の上に昇ってきた。音楽が続いている間、そ
の月は輝く続けました。日文研が最も美しくなった夜であったと思います。本当に感銘深い一夜
でありました。日文研創立何周年かになりますが、最も美しかったのは夕べであったと思います。

それも非常に幸運に恵まれまして、幸運と、皆様の非常に熱心なご協力と、各地の水準の高い
学問の成果を、集中的に示してくださいました。誠に心から御礼申しあげる次第であります。ど
うもありがとうございます。所長に代わりまして…。

河合 ありがとうございます。別府先生、具体的なことをおっしゃったのですが、どんなこ
とでしょうか。

● ちょっと大事なことをいい忘れたのですが、私の提案に関心のある方、賛成はしなくても
いいから関心がある方は、外の入口のところに箱を置いておきましたので、そこに名刺でも入れ
ておいてください。ないしは、名刺をお持ちでない方でしたら、名前等を書いておいてください。

河合 それでは今急のお話ですが、別府先生のお考えに賛成というよりは、関心があるという
方は、お名前なり、名刺なりを、箱に入れていただいて、後また考えていただくということにし
ましょうか。

それではもう時間が過ぎてしましまして、私がまとめをいうはずでしたが、芳賀先生は深層心
理学者になられたかどうか知りませんが、私のいうべきことを全部おっしゃいましたので、私は
もうこれ以上いわずに、皆さんのご協力を感謝してこれで終わりたいと思います。どうもありが
とうございました。

(閉 会)